

遍路道の先導者

長谷川 修

四国遍路を歩く人が、常にお世話になり頼りにしているものが二つある。一つは赤いペンキで描かれた道案内であり、もう一つは黄色い表紙の遍路用地図帳だ。どちらも「へんろみち保存協力会」の作であるが、この会を立ち上げたのは、松山市で寝具商を営む宮崎建樹さんだ。

宮崎さんは四二歳の時に大病を患い、病後のリハビリにと初めて遍路に出かけた。当時（一九八〇年代）の四国は自動車道の新設が盛んな時で、遍路道は雑草が茂り荒れ果て、人々の記憶から忘れつつあった。彼も遍路道を尋ねながら歩くのに苦労し、これでは初めての人や遠方から来た人が歩き通すのは難しいだろう、と痛感した。

まずは道案内の製作に取りかかった。標識杭は、霊場までの方向と距離を書いたトタン製横板を縦杭で支えたものであり、方向だけを示すステッカーは、電柱やカーブミラーの支柱等に張り付ける。どちらも一つ一つ場所の設定、関係者の了解、取付け工事等大変な

作業であるが、一人で近所の遍路道から始めた。その後おいおい協力者も現れ、今や四国全体で標識杭は二千本、ステッカーは五千枚に及ぶ。

歩き遍路専用の地図帳「四国遍路ひとり歩き」も手造りだ。二万五千分の一の地図に、霊場間の道、宿泊所や休憩所、食堂やコンビニ等の位置を、自ら距離を測り道程を百メートル単位で書き加えたもので、巻末には宿舎一覧も付いている。九〇年に自宅を発行所へ出版し、実践的と好評裏に迎えられた。道や宿の変動もあってほぼ三年毎に改定版を出しており、今や歩き遍路の必需品となっている。

この他に保存協力会の事業として、地元との協力で、埋もれた旧遍路道の復元や草刈り等の道路整備にも取り組んでいる。

宮崎さんは二〇一〇年、一人で松山市近郊の山に調査に出かけたまま行方不明となり、約一ヶ月後に山中で遺体となって発見された。享年七五。遍路道を愛し、遍路道の復旧と保全に半生を捧げた彼のことを、四国路を歩く人は心に留めてほしい。